

# 天竜びとが伝える災害の教訓

## 過去に起きた災害の教訓に学ぼう!

### 天竜びとが伝える 「36災害」

#### 間近に見た豊丘村伴野の36災害



水泳や魚取りをして遊んだ天竜川は大切な遊びの場でした。もっともっと親しむことができる川になるといいですね。

●豊丘史学会会長  
原 嘉彦さん(豊丘村在住)

天竜川沿岸にすむ人々は古来から川の恵みを受けてきましたが災害も多く、豊丘村の伴野では正徳5年(1715)6月に未満水(ひつじまんすい)と呼ばれる大洪水がありました。



当時、天竜川の氾濫原を開墾したところは年貢がかからなかったため、領民は少しずつ耕地化していったのですが、このような洪水で何回も耕地が流失しています。

本格的な堤防が作られたのは寛延3年(1750)頃対岸に出来たのですが、その水流の剣先が伴野村に向かうようになり、新たな堤防の必要性が生じて文化6年(1809)に作られたのが現在の伴野堤防の前身です。その後たび重なる洪水にあいながらも、何回もの工事で補強をして流域を守ってきたというのが伴野堤防の歴史です。

江戸時代から明治にかけて水田も増え、堤防に植えた桜の花見が楽しめるまでになった伴野堤防が決壊したのが昭和36年6月のことでした。6月半ばから降ったりやんだりしていた雨は25日頃から集中豪雨となり、28日までの雨量は約600ミリに及んだと伴野新田災害復興記念碑に刻まれています。

伴野堤防は天竜川の濁流で28日午前5時10分頃に決壊が始まり、38町歩の水田と27戸が流失するという惨事となりました。支流の虻川・壬生沢川も大氾濫しました。私は当時30歳でしたが今も脳裏に焼き付いています。

天竜川は、子どものころは毎日のように遊んだり泳いだりした生活の一部でした。豊丘史学会の「豊丘風土記」で災害者の記録を載せたこともありますが、身近な川と安全に付き合っていくためにも過去の災害を語り継いでいくことが大切だと思います。

“災害は忘れた頃にやってくる。”を忘れず備えておくためにも関係各庁や地方自治体、住民による災害予防を継続するのが最も肝心であると思います。また、親しめる川づくりも必要です。



暴れ天竜と呼ばれた天竜川の流域では昔から数多くの土砂災害や氾濫などの災害が起きてきました。過去の教訓に学び、いつ起こるかわからない災害に備えましょう。

### 天竜びとが伝える 「H18災害」



地域を自分たちの手で守ろう  
平成18年7月の豪雨災害を教訓に  
区をあげて防災に取り組んでいます。

●岡谷市花岡区長  
小口 廣明さん(岡谷市在住)

あの災害の記憶が頭から消えることはありません。前日からまんじりともせず夜を過ごし、19日は午前3時から見回りをしていたのですが、第5町内会長からの電話で土石流発生を知り、すぐに湊小学校への避難を指示しました。すでに行方不明者が出ていました。

物の備えができて最も大事なのは心の備え。自分の命は自分で守る。異常を感じたらすぐ行動を起こしましょう。災害に強い地域づくりも大切です。

電線が切れて火事になった家もありました。大きな石が火花を散らしながら転がってきました。大変な事態が起こった、区長として何とかしなければという思いで必死でした。

土石流が起こった時に横に逃げた人は助かり、まっすぐ下に逃げた人は犠牲になりました。逃げ方をよく知っておくことが大切だと思います。また、避難するにしてもどこに集合してどのルートで移動するかを徹底しておくことの必要性を痛感しました。個々に避難して親戚



土石流によって倒壊した針葉樹林



土石流によって押しつぶされた民家

のお宅に行ったりした方の安否確認に手間取ったからです。復旧ボランティアの皆さんの応援は本当にありがたかったです。

7人の犠牲者を出した災害を風化させてはいけません。区民は防災訓練に真剣に取り組むなど、防災意識を高まっただけではダメです。要援護者用に「タンカ」ではなく、両手が空く「おんぶ帯」も購入しました。非常袋を備える家庭も増えました。砂防えん堤も新たに造られ、区では復旧工事が終わった山へ広葉樹の植林も行っています。

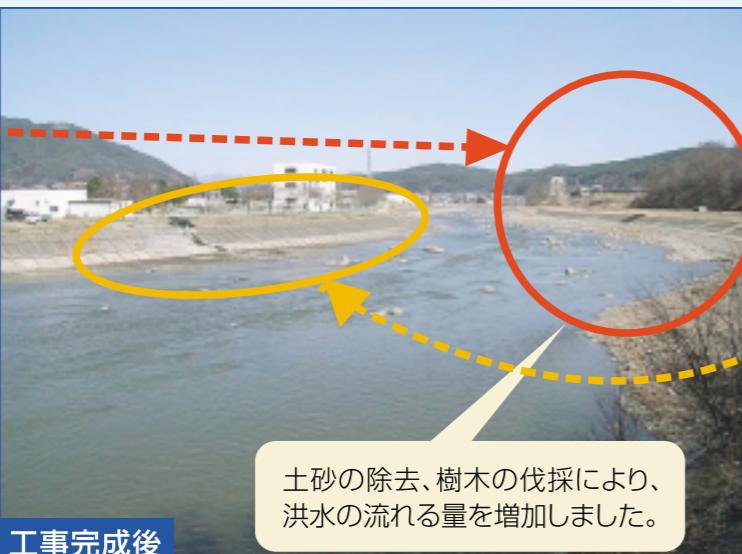
私が考える、災害から学び後世に伝えるべき教訓は、地域の過去の災害を知り、身近な山に関心を持って手入れをすること、そして「隣組の精神」をもう一度取り戻そうということです。お金も人手も足りない行政に頼るのでなく、自分たちで地域を守る気概が大切だと思います。

### 平成20年度のゲキトク!

ゲキトク(激特)とは、河川激甚災害対策特別緊急事業の略称で、洪水による大被害を受けた河川において、再び同程度の洪水が発生しても被害が発生しないように河川工事を実施するものです。天竜川上流河川事務所と長野県は、平成18年から5年をかけて、諏訪湖周辺から三峰川合流点までの間を河川工事しております。昨年度の天竜川上流河川事務所の工事の様子を写真にて報告します。また、今年度も引き続き実施しますので、皆さまのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



工事実施前



工事実施中



根固めブロックの敷設

土砂の除去、樹木の伐採により、洪水の流れる量を増加しました。

洪水によって削られることを防ぐために基礎部分を敷設しました。

### 天竜びとが伝える 「58災害」



地域の特徴を知り尽くした  
先人の言い伝えを  
防災に生かしたいものです。

●元高遠総合支所長  
伊東 義人さん(伊那市在住)

悔みに悩んで出した避難指示、でもよかったと思っています。これからは局地的な豪雨への対応が必要ではないでしょうか。

高遠地区は江戸時代から災害との戦いの歴史を繰り返してきたのですが、最近では昭和57年、58年と平成18年の災害が大きかったのもですね。特に57年は8月と9月の2回にわたって発生しました。三峰川の支流である藤沢川と山室川の氾濫、58年は藤沢川の支流の松倉川の氾濫です。このときの教訓で藤沢川に2カ所、山室川に1カ所、新たに砂防えん堤ができていたので、平成18年災害は被害が最小限に食い止められたと思います。

このときには、御堂垣外地区や松倉地区ではいつもと雨の降り方が違うということで、一部の人は前日から公民館に自主避難を始めていました。山が動いているという話もあり、もし崩れて松倉川がせき止められたら大変なことになると思い、市長と相談のうえで335人の方に御堂垣外の多目的集会所への避難指示を出したのです。

災害が発生していない中での避難指示には迷いもありましたが、私が直接説得して全員避難していただきました。結果的に土砂崩落はありませんでしたが、今でもやってよかったと思っています。大切なのは現在の状況を詳しく伝え、地元の方々の意見も尊重して決定することです。災害対策本部には地元の責任者にも入ってもらおうことです。警察や消防に無人となった集落を警戒してもらい、避難中事件は1件もありませんでした。



前赤坂地区 昭和57年～58年頃 災害復旧前

教訓として残ったのは、持病があり薬が必要な高齢者や体が弱い方への対応、隣近所が声を掛け合っていないときにどうするかを決めておくこと、昔の人の知恵を生かすことなどです。「入笠山に降ると三義が危ない、守屋山に降ると藤沢川が危ない」の言い伝えは、まさしくそうだったのです。